

博物館をめぐる国際協力：みんなくりにおけるJICA 博物館研修コースとザンビアでの展開

著者	吉田 憲司
図書名	博物館への挑戦：何がどこまでできたのか。日高真吾・園田直子編。
開始ページ	377
終了ページ	382
出版年月日	2008-11-25
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009291

博物館をめぐる国際協力

—みんなくにおけるJICA博物館研修コースとザンビアでの展開—

吉田 憲司

(よしだ けんじ/国立民族学博物館)

1. 国立民族学博物館における「博物館学集中コース」

博物館は、単なる過去の遺産の保存・継承の装置ではなく、新たな文化を作り出す装置でもある。日本においては、運営母体の財政難から、にわかにその存在意義に疑問符がつきつけられつつある博物館であるが、あらゆる面でグローバル化が進む中で、新たな社会のあり方、新たな世界のあり方を構築することが求められている今日、文化を構築する装置としての博物館の役割はますます高まっている。

アフガニスタンやイランにおいて、戦闘のさなかから、現地の博物館や文化遺産の動向に、内外の大きな関心が払われたことは記憶に新しい。一方、世界各地のさまざまな民族のあいだで、現在、自らの歴史、自らの文化を保存し、表象することを目的とした博物館や美術館の建設が急速に進んでいる。これらの動きは、博物館が、国家や地域、民族のアイデンティティの核となることが改めて認識され、そのさまざまな可能性が追求され始めたことのおかげである。世界各地での博物館の増加、博物館活動の展開にともない、博物館運営に必要な知識や技術の修得の機会を求める声は、とりわけ欧米以外の国々のあいだで、年を追うごとに強くなっている。しかし、博物館の理論と実践を総合的に研修できる場は、それぞれの国では皆無に近い。そうした状況の中で、現在、国立民族学博物館（民博）が、国際協力機構（JICA）からの委託事業として、滋賀県立琵琶湖博物館と連携して実施している「博物館学集中コース」は、世界的に見ても極めてユニークな試みとなっている。

毎年、原則として10カ国からそれぞれ1人、計10人の参加者が、世界各地からやってくる。昨2007年は、コロンビア、グアテマラ、ガイアナ（2名）、ペ

ルー、フィジー、ヨルダン、エリトリア、ザンビア（2名）の計8カ国から10名、本年度2008年は、ペルー、コロンビア（2名）、ヨルダン、ベトナム（2名）、ザンビア（3名）の計5カ国から9名の研修生が参加した。約4カ月にわたる研修の項目は、博物館の歴史や最新の動向、地域コミュニティとの連携を基にした収集のあり方や資料管理の方法、保存科学、展示デザイン、写真撮影、データベース構築から、模型制作、博物館教育、ミュージアムグッズの開発、危機管理などに及ぶ。いずれも、一方的な講義というよりは、ディスカッションや実践を重視したワークショップ形式のものが主である。研修の講師は、民博や滋賀県立琵琶湖博物館の教員・研究員がつとめるほか、分野に応じてそれぞれの専門家を招聘している。作品の梱包のワークショップは美術運送会社のプロフェッショナルに、展示照明のワークショップは照明機器メーカーの研究者に、保険実務については保険会社の国際業務担当者に依頼する。期間中には、その年度にもよるが、関西圏の博物館・美術館だけでなく、北海道、沖縄、東京、広島、九州などの博物館を視察する研修旅行も組み込んでいる。

博物館・美術館の運営に、どこにでも通用するようなモデルは存在しない。日本の博物館・美術館のさまざまな活動にじかに触れることを通じて、それぞれの国での博物館の活動に生かせるものを見つけ出してもらうというのが、このコース編成の目論見である。博物館にまつわる多種多様な活動をこれほど総括的かつ集中的に研修できる場合は、我田引水ながら、世界的に見ても他に類がない。

ただ、研修の場とはいえ、「研修生」は、それぞれの母国の博物館・美術館活動の第一線で活躍しているキュレーターたちである。それぞれに豊かな知識と技術、経験を備えている。研修の場は、実のところ、日本におけるわれわれの経験と彼らの経験を付き合わせ、互いに学び、新たな認識を分かち合う、共同作業の場となっている。

2. 前身の「博物館技術コース」

この現行の「博物館学集中コース」は2005年から開始されたものであるが、この研修コースには、その前身がある。森田恒之先生が中心になって、1994年に創始され、2004年度まで続いた「博物館技術コース」である。当時のコースは、JICAが主催し、国立民族学博物館では、その一部を「博物館学国際協力

セミナー」として運営するかたちをとっていた。とはいえ、JICA自体が、博物館運営のノウハウを有しているわけではもちろんない。このため、当時のコース全体の運営は、森田先生の個人的なネットワークと尽力によるところがきわめて大きかった。その事業を、10年の長きにわたって継続しえたのは、やはり、先生の類まれなる資質と識見・経験の賜物である。

森田先生が定年退官されたあと、このコースを引き継ぐことになった私たちがまず直面した課題は、そうした資質の点でも、また、博物館学についての該博な知識と経験の点でも、先生の域には遠く及ばない後進の面々の間で、集団で継続的な運営ができる体制をいかにして整えるかということであった。また、コースの再編に当たり、過去10年の研修成果の点検・評価の必要性にも迫られた。

民博のもつ国際的ネットワークは対象国の博物館事情を踏まえた研修の実施に不可欠の要因であり、またその先進的な情報・資料管理や博物館運営が研修に大きな効果を挙げてきたのは確かである。ただ、その一方で、研修生の多くにとって切実な問題である、自らの属するコミュニティの資料を収集・整理し、展示するという課題については、主として海外資料の収集・展示に関わる民博での研修に限界があるのも事実である。このため、新たなコースでは、この分野の博物館活動で先進的な業績をあげている滋賀県立琵琶湖博物館と密接に連携し、より地域社会に密着した博物館技術の研修を進めることとした。また、「博物館学集中コース」では、研修の対象を博物館実務の担当者に特化した。以前のコースでは、対象者の定義が曖昧であったため、博物館のトップマネジメントを学ぼうとする幹部と、保存や展示の技法など博物館業務の実践的技術を学ぼうとする研修生がややもすれば混在し、時としてコース運営に問題が生じたことも時にみられた。新たなコースは、その対象を博物館の諸活動に直接かかわる人々に対するものであることをより明確化し、人材育成に重点をおいたコースとした。さらに、日本における集団研修の成果を、研修参加者のそれぞれの母国に根付かせるための、フォローアップ事業への展開も、JICA側に積極的に提案していくこととした。このようにして、コースの名前と運営形態は変わることとなったが、博物館を通じた国際交流の促進という、森田先生がコースを立ち上げる際に掲げられた当初の目的は、間違いなく、そのまま受けつがれている。

2005年から始まった現行の「博物館学集中コース」と、その前身の「博物館技術コース」をあわせて、2008年度までの計15年間で、計51カ国、154人の研修生を迎えたことになる。このコースを通じて築き上げられてきた、世界の博物館とその関係者をめぐるネットワークは、それに関わったすべての人と機関にとって、かけがえのない財産である。海外調査の折、かつての研修生が母国で活躍する姿を目にすることほど、嬉しいことはない。なかでも、アフリカのザンビアで、これら二つの研修コースへの参加者が6名に達した2005年に、それら研修修了者が主体となり、国内の博物館関係者を対象とした研修セミナーを独自で開催することになったのは、特筆すべき成果であった。日本での研修の成果が、それぞれの国でさらに広がり、それぞれの地の独自の営みにつながっていくという、「博物館学集中コース」の計画当初から私たちが目標としていた展開の形態が、そこにようやく実現をみたからである。

3. ザンビアでのフォローアップ事業

ザンビアでの「博物館学集中コース」のフォローアップ事業は、JICAならびに日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業の共同の支援を得て、「博物館学ワークショップ・イン・リヴィングストーン」として、2005年12月5日から9日までの5日間の日程で実施された（現地での準備期間は除く）。このワークショップは、前述のとおり、「博物館技術コース」「博物館学集中コース」に参加した6名の研修修了者が、自らが講師となって、日本での研修に参加する機会を得なかったザンビア国内の博物館関係者を対象に、短期集中での博物館学研修を実施するというものである。会場には、ヴィクトリア瀑布（現地名モシ・オ・トニヤ）に近いリヴィングストンの町にあるリヴィングストーン博物館が選ばれた。同博物館は、現在ではザンビアの国立博物館のひとつになっているが、英国植民地時代の1930年代に創設された博物館で、南部アフリカでは有数の歴史と規模を持つ博物館である。

講師にたった元研修生は、ジョージ・ムデンダ（ルサカ国立博物館長）、リワリ・ムショカバンジ（リヴィングストーン博物館考古学部門部長）、エマヌエル・チペラ（モトモト博物館保存科学担当）、チボ・シムンチェンブ（ルサカ国立博物館民族誌部門部長）、テンダイ・ムレヤ（リヴィングストーン博物館図書室司書）、それにイヴォンヌ・ムララ（ルサカ国立博物館副教育担当、元研修生同教育担当

チャリティ・ムワベの代理、ムララ氏自身は、その後2007年の「博物館学集中コース」に参加した)の6名であった。肩書きはいずれも2005年のワークショップ開催時のものであるが、日本で研修を終えた者たちが、その後、母国の博物館界の第一線で活躍していることが、その肩書きからだけでも窺えよう。一方、ワークショップへの参加者は20名を超えた。ザンビアには現在、ルサカ国立博物館、リヴィングストーン博物館、コッパーベルト博物館、モトモト博物館の4つの国立博物館が存在するが、参加者には、これら国立博物館員のみならず、近年、各地の民族集団単位で設立の動きが進んでいる私設博物館の関係者も含まれていた。日本からは、民博から、園田直子氏、川口幸也氏、私の3名と、愛知県犬山市にある野外民族博物館リトルワールドの主任研究員の亀井哲也氏、それに元青年海外協力隊員としてルサカ国立博物館で博物館教育活動に携わり、当時はイギリスのロンドン大学の修士課程に在籍していた五月女賢司氏の計5名が、いわゆるファシリテーター(ワークショップの進行・調整役)として参加した。

5日間の日程のうち、第1日目(月)は展示デザイン、2日目(火)は保存科学、3日目(水)はデータベースづくりを中心としたドキュメンテーション、4日目(木)は博物館教育、そして5日目(金)は総括討論にあてられた。いずれの研修も、ザンビア人元研修生による、日本での研修の成果を反映した現地での実践例の報告と、日本側参加者による実技的なデモンストレーションを組み合わせて構成された。もとより、5日間のワークショップは、各分野のイントロダクションの域を出るものではない。しかしながら、その5日間は、日本側ファシリテーターを含めた参加者全員の間で、ザンビアと日本のそれぞれにおける博物館事情を反映した知識と経験を共有する貴重な機会となった。

このリヴィングストーンでのワークショップは、日本での集団研修の成果が、それぞれの派遣国において根を張り、拡大していくという、国際協力の分野でもいわばモデルケースのひとつとして、ザンビア政府の側からも、またJICAの側からも高く評価された。その結果、続く2006年から3年間には、JICAの「博物館学集中コース・フォローアップ研修」として、日本側から専門家が派遣され、各年度、それぞれに分野を特化した形で、およそ1ヶ月にわたる集中的な技術研修が実施されることとなった。すでに2006年度にはコモド・デザインの堀孝氏による展示デザインの研修、2007年度には民博の日高真吾氏、千里

文化財団の藤田孝氏による保存科学の研修が実施され、2008年度には収集、すなわちフィールドでの記録作成とデータベース化に関する研修を実施する予定である。

こうしたフォローアップ研修は、いわゆるJICAによる「国際協力事業」の一環であり、日本から専門家を派遣して、現地博物館関係者を対象に「技術移転」を行うのが趣旨であるが、すでに述べたとおり、博物館の運営には、どこにでも通用するようなモデルは存在しない。1カ月間のフォローアップ研修もまた、現地の事情を踏まえ、そこでの課題に対する具体的対応をひとつひとつ練り上げるなかで、いわば現地の状況に即した形での新たな「博物館学」を作り上げる共同作業の場となっている。

この小論では、「博物館技術コース」から「博物館学集中コース」、そしてそれを受けてのザンビアでの展開について述べたが、博物館協力をめぐるこうした海外での展開は、本書の他の論考が示すとおり、ザンビアに限られるものではない。博物館を通じた国際協力、しかも地域の実情に根ざした実践的な「博物館学」の創造は、少なくとも数の上で博物館王国を築き上げたこの国の私たちにできる、世界への貢献の回路のひとつであろう。森田教授によって撒かれたその回路は、今、その後進たちの手によって、間違いなく、大きなネットワークに成長しようとしている。